連載エッセイ 206
人生讃歌

さよなら・滝上から来たガンマン

庭の木が風でざわめく音で、書斎でのうたた寝から目ざめた。夢の中で我が故郷・滝上の友人・大原満や長屋栄一、清原尚弘、伴久らがぼくに「おまえ一応、北海道開拓者の息子だろ、ガンマンやれ、起きろ」と、どやしつけられて飛び起きたのだった。ぼくはすぐ書斎の棚の奥からガンベルトを出した。以前ぼくは正義のガンマン・コヒヤマを名乗って旅し、馬に跨って荒野へ消えたが、その後しばらく滝上で農業をしていたあと、また札幌で物書きをしていたのだった。思えばぼくがガンマンになった理由は一匹狼という姿勢が気に入ったからだ。将軍とか殿様などがつくる組織に属せず、独力で何ごとかに立ち向かうところに、人間の尊厳を最も大切なものとする気持ちの育つ余地がある、と考えるからだ。

気づけば世の中、騒然としていた。人間はけっして一人では生きていけない、ということを忘れはじめているように思えた。ぼくは自分が再び正義のガンマンとして旅に出るときがきたのを感じた。感じはしたが、なにせ八十八歳の老廃で歯も膝もガタガタだったが、頑張ることにした。ガンベルトは埃を払うと黒い光を取り戻した。

二〇二五年八月一日、ぼくは、いやな世の中を見て見ぬふりしてきた自分の後ろ暗い過去に呼び出され、滝上へ行って馬に鞍をつけた。正義は立派なはずで、本気だった。全身を黒ずくめの格好に黒いカウボーイハットをかぶり、腰の二丁拳銃用のガンベルトの左右に二本の万年筆をおさめた。ペンは剣よりも強し、拳銃よりも核兵器よりも強し、というのがぼくの信条だ。ナイフも一本持った。草や川魚や小鳥をとって食べ、意見の違う人と出会って投獄されたら、ナイフでトンネルを掘って脱獄するつもりだった。抜けめはないはずだった。馬はフランス原産のペルシュロンで体が大きく剛力であった。ぼくは馬の背に跨って先を急いだ。大雪山を越えた街で輓馬競争に飛び入り参加、一等になってもらった賞金は福祉施設に寄付。人々に「心に太陽を。達者で暮らせ、あばよ」と言って馬に乗った。札幌のススキノへ着き、馬をつないで焼き鳥屋へ入り、手羽先とハツ、タンを五本ずつ食べてビールを飲んだ。十九人いる客に、この街に狡賢い人はいないかと聞くと、この街は文化都市で政治家も経営者もみな心やさしい人ばかりだと言った。ぼくは、まさかと思ったが口には出さず「安心した。引き続き監視を怠らないように。達者でな、あばよ」と言って馬に乗った。

津軽海峡を泳いで渡る馬の背で、ぼくは缶ビールを飲みながら人生とは何かを考えたが、わからなかった。奥羽山脈で野宿後、馬を飛ばして東京・霞ヶ関の巨大官庁へ行き「頼もう」と言うと警護服の三人が来て「老人、君は誰だ」と聞いた。それで「俺を知らんのか。早射ちガンマン、ワイアットアープの生まれ変わりといわれる、滝上から来たガンマン・コヒヤマだ」と肩をいからせた。すると「ガンマンは無法者だ、帰れ」と言った。ぼくは鼻で笑い「もっと勉強せい。一七〇年前のアメリカ西部のガンマン同士に暗黙の規律があった。人

【小檜山 博 文学館が開館】2020年11月1日から北海道滝上町の文化センター内に、生原稿、掲載誌、文学賞、日記、写真、創作メモ、新聞記事など、70年にわたる活動資料の展示が開設されました。　紋別郡滝上町栄町（滝上町文化センター内）　☎0158・29・3735　10:00～17:00　年末年始休館（12/31～1/5）
アクセス：札幌駅からバスで約4時間30分、旭川駅からバスで約2時間30分　紋別空港から車で約40分

の過去を探り過ぎるな。見知らぬ人をもてなせ。相手に戦う機会を与えろ。武器のない者を撃つな。受けた恩を忘れるな。仲間を裏切るな。盗むな。女性を敬え。だ。悪漢、保安官、市民がこれを守ったんだ。一七〇年後の世界に、こんなちゃんとした人間がいるか?・え?・一人でもいるか?・」と詰め寄った。三人が「いません」と顔を伏せた。ぼくは馬を動かし「達者でな、あばよ」と言って出発した。そのあと東北や長野、四国を回って農家の畑仕事を手伝った。

新橋のホテルのバーでビールを飲んでると、二階で偉い人の政策報告会があるというので受付へ行き、山積みのぶ厚い

挿絵/中江潤一

熨斗袋を見、係員に「これ地震、津波の被災地へ寄付してはどうか」と言うと快諾したので、六千万円全額を送ってもらった。新宿の百貨店前へ行くと、馬に乗った黒ずくめのガンマン姿を面白がって人が集まった。ぼくは馬上で二丁拳銃を抜くみたいな格好をして、みんなを楽しませた。そこで集まった一億円を、路上生活の人に届くよう手配してもらった。それからぼくは群集に「我が国の人口が一億二千万人のうち農業人はたったの百四十万人。食べ物の六十二%を輸入してる。どうしたらいい」と聞くと群集の中から「おまえが農業やればいい」という声が飛んできて、みんなが笑った。ぼくが「この前の選挙、半分が投票しなかった。どうする」と言うと「カネくれたら投票する」という声があがって、みんなが笑った。初老の紳士が「カネならある。出すぞ」と言った。ぼくが「カネですむ問題ではない」と言うと紳士は「この世でカネで解決できないことってあるか?」と笑った。ぼくが「ある」と言うと群集が笑った。ぼくはガンベルトへ手をやり「みんな、笑ってていいのか?・」と言って万年筆を抜き、指先でくるくる回してベルトへ投げ込んだ。またみんなが笑い、ぼくは馬を進めた。そのあと沖縄へ行って砂糖黍の収穫を手伝い、中部地方へ戻って地震で倒れた家屋を馬で引き起こした。馬を大阪へ進めて大富豪に会い「おカネもちとは使ったおカネの額の大きさのこと。我々貧しい者に分配してこそ大富豪」と頼むと彼は「そうだ、気づかなかった。心を改める」と言った。ぼくは「さすが大人、達者でな、あばよ」と言って馬に乗り荒野へ向かった。仕事はやりかけだったが疲れた。誰かが継ぐだろうと思った。馬に乗ったぼくの後ろ姿は次第に小さく荒野へ遠ざかってゆき、やがて地平線へ消えた。ガンマン・コヒヤマのその後を知る者は誰もいない。 Ⓙ

■小檜山　博(こひやまはく):作家。神田日勝記念美術館名誉館長。1937年・北海道滝上町生まれ。『出刃』で北方文芸賞受賞。『光る女』で泉鏡花文学賞と北海道新聞文学賞受賞。1997年・札幌芸術賞受賞。2003年『光る大雪』で木山捷平文学賞受賞。2005年・北海道文化賞受賞。2007年・北海道功労賞受賞。